

大学

プレスセンター

ニュースダイジェスト

Vol.221

ヒトや植物の健康を守る 子どもを救う視点も提供

超高齢社会を迎え、歯周病対策に注目が集まっている。歯を失うことが口腔の機能低下（オーラルフレイル）につながり、要介護リスクを高める一因となるためだ。

日本大（東京都千代田区）歯学部歯周病学講座の蓮池聡准教授、同学部感染症免疫学講座の今井健一教授らは、大阪大（大阪府吹田市）微生物病研究所の幸合愛教授



歯周病原細菌とEBVの協調による骨吸収のイメージ（図版提供…日本大）

らとの共同研究で、成人の半数以上がかかると思われる歯周病の悪化にウイルスが関与している可能性を突き止め、そのメカニズムを世界で初めて解明した（17位）。

歯周病はこれまで、歯を支える骨が細菌の毒素などによって溶かされることで進行すると考えられてきた。しかし、臨床現場では細菌の量が少ないにもかかわらず急速に骨が溶ける重症患者もみられるなど、細菌だけでは説明できないケースがあった。一方、歯周病患者から「エプスタイン・バーウイルス（EBV）」と呼ばれるウイルスが検出されることから、その関与が疑われていた。

研究グループは、ヒト化モデルマウスを用い、EBV感染から脂質分解酵素の増加、骨を壊す破骨

細胞の活性化に至るメカニズムで、骨吸収を伴う歯周病様病変が起きることを突き止めた。また、実際の歯周炎患者でもこの酵素が多く発現していること、さらにこの酵素の阻害薬の投与によって骨吸収に関連する分子の発現が抑制されることも発見した。

蓮池准教授は「細菌とウイルスの協調による重症化の仕組みを示せた。既存の阻害薬を活用して急速に進む歯周病を抑える道を開きたい」と説明する。

